

詩って特別な、神聖な言葉だと思うんです

奈良少年刑務所で詩と絵本の教室を10年間開き、少年達の驚くような変化を経験した

寮美千子さん



寮美千子さんは、詩集・絵本・小説(SF、ファンタジー、純文学等々)・ノンフィクションなど幅広いジャンルにわたって50冊にのぼる本を出している詩人で作家。彼女のセンスは世の流れより10年単位で早いそうで、本が出てしばらくたってからオペラになったりラジオ劇になったり、絶版になっていたものが再版されたりと評価されるようになるという。

今の世は「生産性のないものは生きる値打ちがない」とされて障がい者や弱者が生きづらくなっており、また自己責任論が蔓延して貧乏なものも不幸なものもすべて個人の責任にされてしまう傾向が強くなっている。しかし寮さんはそういった風潮に対し、奈良少年刑務所で10年間開いていた詩と絵本の教室で、少年達が目を見張るように変化し解放されていった経験から、個人の責任以前に社会に問題があるから犯罪に追い込まれてしまったのだと、本や講演会で発信している。この少年刑務所でのクラスはあいにく刑務所自体の閉鎖により中断してしまっただが、これは犯罪者に限らず誰にでもあてはまるということで、一般の人を対象にした教室も始まっているそうだ。興味のある人は本を手にとってみたり講演会を覗いてみてはどうだろうか。(あ)

——奈良少年刑務所での教室をやるときに、詩を選んだ理由は何ですか？ただ文章を書かせるとかではなく。

寮 ●私自身が詩が好きなんです。子どものころから詩を書く子だったんです。

それに、詩って基本的に短いでしょ？以前に大学で教えてたとき、創作の実作講座を持っていたんですが、長い作品が提出されると大変。授業の時間内で合評するのもむずかしくなっていました。だから、詩のようにコンパクトに書いて読んで、しかも定形じゃなくて、何を書いてもいい自由な形式の方が、授業として使いやすいのでは、ということがありました。

もう一つは、奈良で不思議な詩の会に参加したことです。引越してきた当初は、友だちもいなかったのですが、毎週開かれる古着市に遊びにいらしたら顔見知りが出て、「うとうと会」という詩の会に誘われたんです。「仕出し屋さんが会場」って、どんなところだろうかと思って行ったら、小さなお座敷もあって、そこが会場。集まってきたのは、お寺の奥さんとか、米屋の若い衆とか、古本屋さんとか。みんな

自作の詩を朗読するんですが、元文学青年で全共闘だった古本屋さんの難解な現代詩があるかとおもえば、超素朴な俳句もあつたりと、てんでんばらばら。みんなが一言二言感想を言うだけで、あんまり深刻にやらないんです。ほとんど聞き流し状態。あとはお酒飲んで食べて、たった1000円。文学系の真剣勝負みたいな詩の合評会とはまるで違う雰囲気でした。微笑ましいな一、こういうのもありなんだなと。それが刑務所で教室を開くときの一助になってると思います。

ものを書くといったときに、自分史を書くとなったら構えちゃうじゃないですか。しかも虐待とかめっちゃくちゃな目に遭ってる子は、自分史なんて簡単に書けない。だからなんでもいいから吐き出せる吐き出し口をと思い、「詩」が一番適切かなと思ったんです。詩を書けて言われるとみんなぎょっとしたり構えるけど、それも大事だと思いました。詩の言葉ってなにかちよっと違う。詩って特別な、神聖な言葉だと思うんです。たとえしゃべり言葉とおんなじでも、「これは詩だ」と思って行換えしてタイトルつけたら、聞く方も「これは詩なんだな」と思って読む。その瞬間にどんな言葉でも「詩にな

る」んです。あの子たち、書くことが苦手な子が多いから申し訳ないと思ったけれど、「立派なことやいいことを書かなくていい。素直なやさしい言葉でいいんだよ」って投げかけてみたら、うまくいったんです。

——その詩の教室で何が起きたのか？

●詩の教室を開く前に、まず2コマの絵本の教室をやりました。これが心の準備体操。1コマ目は、『おおかみのこがはしってきて』っていう、アイヌの父と子の対話の形式になっている絵本を、朗読劇みたいにしてみんなの前で読んでもらうんです。演劇というものの不思議な力もあるし、彼らがすごくがんばって読むと、見る方も「あーよかった、読めた！」って盛大な拍手がおきる。そのとたん、変化が起こるんです。初めての授業から起こりました。拍手なんてもらったことがないから、「え？何が起きたの？」ってとまどいの表情になって、それからじわじわじわって嬉しくなるのが、態度や言葉にあらわれるんです。

授業のはじまりでは、みんなおじけづいてなかなか出てこないんですが、終わりに近づくと

→インタビューの後連れて行ってもらった奈良少年刑務所の正門。明治期に山下洋輔のおじいさんが欧米8ヶ国を視察。受刑者の人権も学んだ上で設計し、百年以上たっている美しい建物。

「やりたい人？」って聞くと「ハイ！」って勢いよく手が上がるようになってるんですよ(笑) 「でも君は今やったばかりでしょう？」っていうと「僕まだお父さんの役はやってませんから」って。そこまで積極的になっちゃ。たった1時間半の授業で。

1カ月後の2コマ目の授業では『どんぐりたいかい』というどんぐりの背比べを絵本にしたコメディを6人の集団でやります。ここでもまた大きな変化が起きて、みんなで力を合わせて工夫まで始める。もうみんな劇団仲間みたいになるんですね。単なる朗読ではなく、朗読劇というお芝居で、対話という形にするとよけい効果が高いみたいです。

私もほんとにびっくりしました。1時間半でここまで変わる？って。よそよしくて交流しませんオーラを出しまくっていた子も、そういうのが全部ほどけて笑顔が出てくる。

—— 集まった10人の子たちはお互い知らないんですか？

●知らない子がほとんどです。13ある実習場から、一番困難を抱えている難しい子が選ばれてくるわけです。仕事がよくできないとか間違えとか、しかもコミュニケーションができません、注意されても話も通じない。みんながいらいらしてその子をいじめたり、工場中がカリカリするという、そういう子を選んでくるわけです。だから元々顔を合わせる子は少なく、その場で初めて会うというのが多いです。誰とも息の合わない子を集めているわけだから、最初はうまくできないんだけど、回を重ねていくうちに緊張もほぐれるし、どんどん息が合っていくんですよ。台詞を関西弁風にアレンジしたり、かわいいですよ。みんな楽しんで、見る方ももちろん楽しくなる。どんどん役を入れ替えて1時間半やります。

もともと気が弱い子、繊細な子が多いです。彼らに接していて、それがよくわかりました。私自身、それまでは凶悪なモンスターといった先入観を持っていました。でもまるで違ったので「これはみんなに伝えなければ」と思っただけです。誤解されたままで社会に出たら、差別の目に晒されて厳しいだろうと思ったんです。少しでも彼らが生きやすい社会になるためには、まず知ってもらうのが一番。だから、本を書くことにしたんです。

—— けっきょく奈良少年刑務所はつぶれてしまったそうですが、その教室自体どこかに引き継がれてないんですか？

●ないんですよ。それは私が教師の資格も持っていないし、臨床心理士でもないし、単なる作家



で、世の中的にはなんの地位も保証されていないからだと思います。野良なんです(笑) 野良講師が、なんの理論的後盾もなく、思いつきでやった教室が、たまたま効果を上げた。そんなものを続けるということは、きっと行政にはできないでしょう。

もっと原始的に、細胞分裂のように教室を拡げていこうという動きはあったんです。鑑別所の先生がオブザーバーで入ったり、教官だけでなく刑務官も入ったりして一緒に授業をしました。その方たちが覚えたら、刑務所の中でも教室の数を増やし、鑑別所とか少年院とかいろいろなところでおなじ授業を増やしていこうという計画があったからです。この授業を研究してシステムティックにしようと、東京学芸大学教職大学院の成田喜一郎教授が、次の期から指導者としてでなくて参加者として参加し、体験してもらって、授業のノウハウをきちんと確立して、論文発表するということになっていました。ところが、その矢先に奈良少年刑務所自体が廃庁になってしまったんです。結局、論文は書いて下さったんですが、体験ではなくて聞き書きになってしまったし、残念です。

—— それが中止になったのはほんともったいないですね。

●私たちが自分で自分の首をしめたんですけれどね。というのも、刑務所の建物の保存運動をやって成功させたので、それが元で刑務所がなくなることになってしまったんです。明治の煉瓦建築が国の重要文化財に指定され、耐震補強するから、この際廃庁に。そして「文化財を有効活用するためにホテルにする」って言われちゃって。そんなつもりで保存運動したわけじゃなかったのに、え——！って泣きそうでした。

刑務所の煉瓦建築のハードは残ったけれど、その中で作られてきた文化、教育といったソフトはきちんと継承されなかった。一人一人の先生が転勤先に持っていったけれども、アウェイ

な場所での実践は、実際には難しかったという話を聞いています。

—— 今後やっていこうという計画はないんですか？

●この9月から、奈良の児童自立支援施設「精華学院」で詩の教室を開くことになりました。あちらからオファーがあったんです。ここは、昔は教護院と呼ばれていたところ。いわゆる非行少年少女や、家庭環境に問題がある子に入所してもらい、夫婦が指導者となって、家庭的環境のもとで共に暮らし、学ぶ施設です。広い施設のなかに学校もあって、基本その敷地の中で暮らしている。少年院ではないのです

が。そういう環境で育った子がうまく社会適応できなくて、道はずれて犯罪者になって刑務所に入るというリスクが高いんです。

刑務所に通ってたとき「この子たちが刑務所に来る前に、こんな絵本と詩のプログラムに出会えば、犯罪をしなくて済んだんじゃないか」って思っていました。ですから、それを実現できることになってうれしく思っています。

もう一つは、この教室は犯罪者だけでなく、あらゆる人間に有効だと思うんです。実際、町中で一般向けに6回やってみました。ギャラリーと組んで、絵を見て感じた事を詩に綴り、それを発表して感想を述べあう会です。「えにし(=絵に詩)」というタイトルにしました。もちろん「縁」の掛詞です。それがすごく成功してみんな喜んでくれました。日常生活でなかなかしゃべれないこと、出せない気持ちを出すことができたんです。

たとえば二人の子どもの後ろ姿が夕日に向かっている絵があったら、それを見て死んだ弟のことを思い出したとか、子どもの時にお母さんが心中しようとして線路に横になったみたいなことを想い出す。それを詩にして発表すると、心の扉が開いて「私もこんなことが」「あんなことが」とみんな吐きだして、お互いながさめあい、今日初めて会った大の大人がおいおい泣いて、泣いてる人の背中を撫でてあげたりするわけですよ。そして終わったら「なんかすっきりした」「言いたくて言えなかったことをここで出せてよかった」みたいなことを言うんです。こんなことになるんだなって、びっくりしました。

—— そこにはどんな人達が来たんですか？

●参加者はフェイスブックとツイッターで募集しました。「えにし」に参加した人や、私の本を読んだ人が「自分でもこんな詩の会を開いてみたい」って言いだして。じゃあ、詩の教室を開きたい人のための教室を開こうかなと思



「わかちあう詩の会」を始めました。免許とか出すわけじゃないけれど、自分でまず体験してもらって、それを持ち帰って各自で詩の会を開いてほしい。たんぼぼの種が飛んでいくみたいに、広まってほしいんです。こういう形式のものが一つの文化になっていけばいいな、と思っています。

ただこの詩の教室の難しいところは、普通はこうしてあしてってやり方の決まりがあるじゃないですか。うちのはそれが無い。無いというのが決まり。つまり「自由にする」っていうのが文化なので(笑)それを伝えるのが難しい。

ただどいくつかのポイントがあって、上手いとか下手だとか、表現力があるとかないとか、内容がいいとか悪いとか、そういう評価は一切しない。詩を読んで、自分が何を感じたか、それを語る。あるいは、その人の気持ちに一生懸命寄り添ってみる。最低おさえるのはそのへんだけです。いわゆるいい詩を書くための勉強会ではなくて、詩を分かちあう会ですから。すでにもう2回開催しましたが、思った以上に心の通じあう会になって驚いています。開催地は奈良ですが、宝塚や名古屋から通ってきてくれる人もいます。連続講座で4回で一期終了を予定していますが、もうキャンセル待ちがいっぱい。関東からも来たいという人もいて、第2期を考えているところです。

でもほんとは抑圧されはき出す必要があるのは社会の上層部の人じゃないか、って夫の松永は言うんです。「だから医者とか弁護士とか社長とか、社会的地位の高い人を集めて高い値段でやったらいいんじゃないの」って。安倍首相とかぜったい受けて欲しいよね(笑)

みんな無理してがんばってるわけで、自分の無理を人にも押しつけてくる。俺はこれだけ無理してるんだと。男らしさの神話とか、弱音を吐いちゃダメとか、そういう圧力が社会を悪くしている。それで読み解くと、世の中もみんな読み解けちゃうかんじがします。この詩の教室は、その呪いを解く場なんです。

——無理している人は、自由にやってる人がにくたしくなってじゃましたり。

●そうそう。発達障害の空気が読めない子がいじめられるのも、空気を读みすぎて苦しくなってる子たちがうらやましくなって頭に来ていじめられるんだと思うよね。なんでそんなに自由にしてるんだって。

——何でもかんでも自己責任ですもんねー。

●自己責任でおかしいですよ。人って人の繋がりの中でしか生きられないんだから、私なんて生まれてから一度も米を作ったことないのにお米を食べられるのは、お百姓さんから流通の人まで、いろんな人に依存しているからですよ。誰一人、人に依存してない人はいないですよ。その人になにか問題があったら、その繋がりの中で何か困難が生まれたんだな、と考えるのが本来でしょう。あるいはその繋がりがなかったから犯罪になったのかな、と。

——今はすぐ自己責任を言い出したりする風潮がありますね。それは政治家とか権力握ってる人がそういうことを言うから、みんな追従するんだろうと思いますが、それに対してどういう風に対抗すればいいんでしょう？

●ねえ！ 政治はぜったい変えるしかないと思うけど、有権者がきちんと受け止めてないのが非常に困ったところですね。

やまゆり園事件(*2016年7月、相模原の津久井やまゆり園の入所者19人を、元職員が刺殺した事件)の植松くんも「ぜったい政府に褒められる」と思ってやったわけでしょう。政府や権力が発してるメッセージを無批判に真に受けて実行したのが植松くんなんです。政府はいろいろ言いくるめながら、実際にはあきらかに弱者切り捨てのメッセージを発してるじゃないですか。「一億総活躍」とか「障害者自立支援法」とか。もう日本語破壊だと思いますよ。自立を支援してるんじゃないで「政府は面倒みないから自立しろよ」って言っている。積極的平和主義というの、やられるまえにやっちゃおうっていう話で、全然平和じゃない。それをきれいごとや嘘で塗り固めてる。でも、実際には「弱者を切り捨てて、戦争のできる国にしよう」というメッセージを発している。植松くんには政府の本心を読み取る力があり、彼はそれをぜんぶ真に受けたんですよ。彼に足りなかったのは批判精神です。これおかしきだろ、人権はどうなるんだ、自分が障害者になったら排除されるのか、というところに行き着けば批判できるけど、それができなかった。だから、彼はある種の洗脳された軍国少年みたいなものですよ。自閉症のご息を持つ神戸金史さん(RKB毎日放

送記者)が植松くんインタビューに行ったとき、彼は「あの事件を起こして少しは世間の役にたつたと思う」と語ったそうです。それまで自分は役に立たない人間だったと感じていたんですね。だから「活躍できない人を殺して税金を節約する。それが僕のすばらしいお仕事」と思ってしまっ。つまり「一億総活躍の呪い」をかけられて、あれをやってしまった。「活躍しないと存在意義がない」と思って。

昨日(8/2)、前川喜平さんと大阪でコラボ講演だったんですが、前川さんが「調教と教育は違う」と。調教すると猫でも犬でも熊でも言うこと聞くようになっちゃう。「お国のために死にます」ということになっちゃう。でもそれは違う。教育とは自分の頭で考えて、きちんと自分の意見を持ち、批判精神を持てることだと話されてました。

植松くんは調教されてしまった人間だということです。批判精神がなかったことは責められるべきですが、それ以前に、彼をそういうふう追い込んだ社会があったということ。彼はそれを先鋭的に鏡のように写しだした。実は植松くんみたいに感じてる人々がいっぱいいて、裾野がダーッと広くて、だからあれだけのヘイト発言もばんばん出てくるわけです。障害者差別も、生活保護蔑視も同根です。彼個人の自己責任に帰してしまっは、その裾野を何とかすることもできないじゃないですか。考えてもらう機会もない。植松くん一人の問題にしないで、そういうところまで見て、そんな世論をどういうふうに変えていこうかってことを真剣に考えないと、また出ますよ、あんなことをする人が。

——寮さんは様々な問題・テーマを多岐にわたってやってますが、自分の中でキーワードみたいなものはあるんですか？

●やっぱり世界に対する違和感でしょうね。居心地の悪さ。

——それはいつごろから？

●子どもの頃からです。「なんか変なんじゃないの？この世界は」って。私が小学校のころは、



喜々として骨董の皿自慢をする寮さん。夫の松永さんの眼差しに注目！↑

中国の水爆実験があって、放射能の雨が降ってと言われて、雨にあたるとはげろぞって。学校の帰り道に急に雨が降ったりすると頭を隠して走ったりという覚えがあるわけです。その頃から、それ変じゃないの？って思ってたの。世界に戦争はぜんぜん無くならないし、人類を何回も滅ぼすことができる核爆弾がたまっているというしね。なんで人類は戦争をやめるっていう簡単なことができないんだろう、殺しあいをするんだろうって、子ども心に不安だし不思議だし、納得いかないって気持ちでした。

そういう中で、世界ってどういうふうにできてるんだろうってという疑問を持ったときに、科学的な解釈の仕方ってというのが一つの助けになった。宇宙の歴史とか構造とか、そういう話を聞いてると、教会で牧師さんの説教を聞いてる以上の心の安らぎを感じたんです(笑) ああ世界ってこういうふうにできてるんだ、こんなメカニズムで動いて、結果、私が今ここにいるんだと。生態学を学んだのもそうだし、地質学や天文学に興味持ったのも同じ理由です。そうすると今度は人間の文化に興味が行く。人類はこの世界をどのように受けとめ理解してきたのか。そこで先住民文化や神話に視点が行くようになったんです。

「世界理解のしかた」が根源にあって、理解できるとちょっとほっとするし安心する(笑) 理解すればするほど、いま人間社会がやっていることのこれが間違っている、あれも違うと明白になってきました。原子力発電なんかも、どう考えても頭悪いじゃんとしか言いようがない(怒) 科学的な目で見れば、そうとしか言いようがないのに、それを経済とか軍事バランスとかいんなことを言って、ごかましてるわけですよ。根源的なところに週れば絶対変だって明白なのに。日本は地震国だしね、中央構造線の上に原発作ったりすること自体、頭おかしいとしか言いようがありません。

—— ところで7月の参院選でれいわ新選組から国会議員になった船後靖彦さんの本を前に出していますね。どういきさつで？

●高校時代を千葉市で過ごしたんですが、ロック喫茶に出入りする不良少女でした(笑) 稲毛の「フルハウス」という店のマスターとはそ

の後も縁があって、詩の朗読ライブをやらせてもらったりしていたんです。そうしたらマスターから「うちでライブやってた子がALSっていう病気になっちゃって、全身麻痺なんだ。詩とか俳句を勉強したいって言うてるから、メールで面倒見てやってくんない？」って言われました。それが船後さん。わたしより2学年下で、学校も違ったけれど、文筆業なんて気楽な稼業をさせてもらってるんだから、それくらいしなきゃバチが当たるかなと思って、添削指導を始めました。それが2005年くらいだったと思う。

—— それを本にしようと思ったのはなぜ？

●俳句では季語もなくて俳句になってないし、詩もだらだら書いてしまって、いまひとつ。だったら短歌が向いているかもと思って勧めたんです。三十一文字ならある程度言いたいことも言えるし、だらだら書かないで済むからって。でも、彼は欲ばって一首に2つも3つもテーマを入れてくるから、「これは2つにばらした方がいいんじゃない？」などとアドバイスしながら作歌してもらいました。「せつかく書くんだから、自分の半生を書いてみたら？」って勧めたところ、爆発的に作歌し始めたんです。少年時代のこと、ロックスターになりたかった大学時代、営業マンでダイヤを年商6億円も売っていたこととか。その絶頂で病気になって、いずれ全身麻痺になると宣告され「呼吸器を付けないなら余命3年」と医師に言われてしまう。彼は家族に迷惑をかけたくないからと死ぬ覚悟でいたんです。でも、いい医師に出会って、ピアサポートという、同病の人をメールを通じて助けるボランティアを始める。これが彼の人生を変えたんです。面倒を見られるだけの側から、見る側になれた、人の力になれた。そうしたら、やっぱり生きたいと思うようになったんです。そういう人生短歌が、いまこの時点まで来たところで、彼が「歌集を出したい」と言いました。なに大それたこと言ってるんだ、と思ったんですが、当時の船後さんはとても具合悪くて、すぐ死んじゃうんじゃないかと心配でした。乗りかかった船だし、だったら冥土の土産になんとかしてあげたいと、小学館



た。頑固でわがままでしょうがない奴だと思っていたけれど、やさしいところはとことんやさしい。彼との対話で、命を救われたという人が何人もいました。見直しました。とうわけで、出版へ。さして売れなかったの、じきに絶版になってしまいました。でも、すごく欲しがっている人がいる。ALSを宣告された人とか家族とか、切実な人もいて、アマゾンで高値がつくわけです。それでも、版元は増刷してくれない。

そしたら、ある日、船後さんからメールが来た。「就職しました」って。なんのこっちゃって思いました。船後よ、ついに頭までおかしくなったか、と。でも、よくよく聞いてみると、ほんとに介護施設の副社長になっていたんです。社長の佐塚みさ子さんが偉かったんです。彼女は最初、訪問看護師として船後さんに出会いました。その後、彼女は自分で会社を興したんです。そして「当事者の声を運営と経営に生かしたい」と、船後さんを副社長に大抜擢。その佐塚さんが「当社で100万分買取りから、船後さんの本を増刷してください」と言ってきたんです。そこで別の版元であるロクリン社に当たってみたら「その条件なら」と出してくれることになりました。「全身麻痺でも社会復帰」という朗読劇をつけ足した新装改訂版で2016年に出版しました。

船後さんは、音楽ライブから講演会まで、全身麻痺でもさまざまな活動をしてきたので、れいわ新選組の比例特定枠の一位に抜擢されました。そして参議員に当選したんですが、本の存在も、小さな一助になったかもしれないって思っています。余命3年と言われた彼が、もう発病から19年、元気なALS患者でいます。当選しただけで、すでに国会のバリアフリー化を実現していますが、任期も6年もあるし、これからの彼に期待しています。



の編集者に相談したら、「うーん、歌集は無理だけどノンフィクションと組み合わせたら本になるんじゃないかな」と。「じゃあよろしく。誰が書いてくれますか？」と聞くと「あなたですよ」と。ええ、そこまで私が？って思いながらも、生きているうちに完成させてあげたい一心で、一生懸命書いたんです。主治医やピアサポートで助けられた人に取材すると、私が知らなかった彼が見えてきまし

INFORMATION

ならまち通信社・れんぞ
〒630-8315 奈良市中辻町 1-1-101
Tel/Fax. 0742-24-4800
info@narapress.jp
http://narapress.jp

↑左が船後さんとの共著。真ん中の3冊は奈良少年刑務所を題材にしたノンフィクションや詩集、絵本。右はインディアン絵本。

←少年刑務所を見たあと、8月で移転する八百屋ろ(つづきの村)と一緒に行き夕食を食べました。ヒゼさんとは詩人仲間です。